

「海のいのち」(立松 和平) 教材分析

一はじめに「海のいのち」は本当に優れた作品なのか？

「いくら読んでも、太一に寄り添っていけない。太一の生々しい感情が伝わってこない。」これが、わたしのこの物語に対する率直な感想だ。太一の心情が、前後の脈絡無く唐突に出てくるようで、太一の心がどう動いていったのかがつながりをもって読めない。例えば次のような箇所だ。

季節や時間の流れとともに変わる海のどんな表情でも、太一は好きだった。

「ぼくは漁師になる。おとうといっしょに海に出るんだ。」

子どものころから、太一はこう言ってはばからなかった。

幼児にして「漁師になる」と強く志している姿を「はばからない」と表現しているのだろうが、やや違和感あり。漁業をなりわいとしている村にあって、「漁師になる」と広言することはそんなに周囲にはばかられることなのか？と思う。「ぼくは村一番の猟師になる！」ならわかるが。

中学校を卒業する年の夏、太一は与吉じいさにでしにしてくれるようなのみにいった。与吉じいさは、太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行っている漁師だった。

「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を自然に遊ばせてやりたくなくなるとる。」「年をとったのなら、ぼくをつえの代わりに使ってくれ。」

こうして太一は、無理やり与吉じいさのでしになったのだ。

漁の技術をなんとしても身につけたい太一。それほどの強い思いはどこから来るのか？「おとうのような漁師になる」とあこがれる存在であった父がなクエとの戦いに破れてしまった。その悔しさを晴らしたいからか？「ロープをまいたままこときれていた父の姿を太一はどう見たのか？」何も書かれていないので推測するしかない。

でしになって何年もたったある朝、いつものように同じ瀬に漁に出た太一に向かって、与吉じいさはふっと声をもらった。そのころには、与吉じいさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」

「村一番」を実感させる叙述はどこにも無い。

ある日、母はこんなふうに言うのだった。「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言い出すかと思うと、わたしはおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで。」太一は、あらしさえもはね返す屈強な若者になっていたのだ。

太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

「あのクエを倒すのだ」という一念に全てをかけて生きている太一の姿が具体的に描かれることなく、「あらしさえもはね返す屈強な若者」とか「母の悲しみさえも背負おうとしていた」という叙述が唐突に出てくる。論理的な解釈はできても、情感で受け止めることができない。

こんなふうには、この作品は、具体的な太一の姿を描く叙述があちこちで省略されているので、限られた叙述をつないで類推していくしかない。「それが『行間を読む』ということだ。優れた文学はそういうものだ。」と言われれば、自分の非力を恥じるしかないが、同じように省略的な表現で描かれた「川とノリオ」には、ずっと心が共鳴する。この違いは何なのか。この作品に対してぬぐいきれなかった私の違和感は、島根大学の富安慎吾氏の論評を読んで氷解した。曰く、

教材「海のいのち」の難解性は、絵本『海の命』にあった。ページと場面との連動性や「二人の海」にあった描写が省かれたことによる、「飛躍」の発生によるものと考えられる。（島根大学教育学部紀要第44巻別冊43頁〜54頁平成23年2月）

「ひとりの海」という原作があり、それを絵本にするときに、大きく叙述を削り、さらに教科書版で挿絵も限定的になってしまったため、あちこちで「飛躍」が生じたという指摘である。

## 二 原作「ひとりの海」を読む

原作「ひとりの海」は JUMPBOOKS の「海鳴星」に掲載されている。これを読むと「海のいのち」で読み切れなかった叙述が具体的に納得できる箇所がいくつもある。例えば次のようなところである。

―父はタイにもブリにもカンパチにも目をくれず、ましてアワビやサザエやウニなど問題にもせず、クエしか獲ろうとしなかった

―偏屈太助が父の通り名であった。―父の頭にあるのはクエのことだけなのかもしれない

―「あんな幸せな男はない。今ではクエになって海ん底ば泳いでいるんじゃないかなろうかねえ」あの事故があつてから、母は何度も同じことをいった。

―太一の「おとう、ここにおられたのですか」という言葉はここに由来する。

「海のいのち」のクライマックス場面で、「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う」という叙述がある。どこか

誇大で共感しきれないもどかしさを感じていたが、原作にはそこに至る太一の熱い思いの高まりがきちんと描かれている。

― 太一は秘かな夢を育てていた

― 一人前の漁師として大きくなつていくにつれ、夢も具体的になってきた。父を殺したという瀬の主のクエを仕留めることだ。

― 太一はそのクエを仕留めるために漁師になったのだと、実際に海に潜るようになってから思うのであった。

― あのクエと会いたい。そして命を賭けた勝負をしたいのだ ― 太一はあのクエを仕留めた時が、即ち自分が漁師として一人前になる時なのだと思いますと定めていた

クエの姿も次のように具体的に描写されている。

― 魚があおぐようにしてえらを動かすたび、水が動くのがわかった。苔や海藻が生えている岩そのものが一匹の魚のようだった。全身は見えないのだが、これまで獲ったクエから推しはかると、体重百五十キロはゆうに超えているだろう。人間を超えた生命力を持つている魚なのかもしれない。

― 魚の目に見られているうちに、太一は自分が殺意もなく静かな気持ちでいることに気づいた。魚はまるで太一の心の底までのぞいているかのようである。殺意ははじめからなかったのか、それとも魚の視線によって溶かされてしまったのか、すでに太一にはわからなかった。

― もう一度戻ってきてても、瀬の主はまったく動こうとせずに太一を見ていた。穏やかな目だった。もし言葉が交わせるのなら、太一はこの魚に問うてみたいことがたくさんある。クエは瞳を固定して太一を見ていた。あまりの無防備さに、この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思ったほどだった。

「大魚はこの海のいのちだと思えた」という叙述も、原作の描写の中で読むと、頭ではなく心で受け止められるような気がする。

### 三 「海のいのち」の教材解釈の進め方

「ごんぎつね」「大造じいさんとがん」など、長年にわたって教科書教材であり続けるような優れた作品は必ず緊密な叙述のつながりを持っている。表現をそぎ落とした「川とノリオ」も叙述は互いに響き合っている。

残念ながら、「海のいのち」は改作により、叙述の断裂があちこちで生じてしまっている。そのことに由来する「難解さ」でしかない。「海のいのちは」は改作によって文学的価値を下げてしまったと言わざるを得ない。したがって、この作品の教材解釈は、原作「ひとりの海」と重ねて読みながら進めていくべきだろうと私は思う。

### 四 「海のいのち」の主題をどう捉えるか

立松和平自身がこの作品について次のように語っている。

海全体はひとつの宇宙である。瀬とは岩があつて海藻が繁り、そこには魚が集まる。海という宇宙の中の小さな森のようなもので、そこにはなんでもある。海藻が二酸化炭素を吸収して酸素をだす。酸素が多いから、気持ちのよいところとなる。海藻を食糧にしたり、隠れ家にするため、大量のプランクトンが集まる。それがもっと大きい動物、エビやカニや貝や魚の餌になる。ここに食物連鎖の輪ができる。海藻や岩の陰は身を潜めるのにもってこいであるから、外洋を回遊して生きる大きな魚も、この瀬に産卵にやってくる。太陽光線が届く浅い海なので、卵が孵化するにもよい。大きい魚の子も稚魚のうちには小さくて、プランクトンといっしょにほかのもっと強い生きものの餌になる。イソギンチャクはあらゆる動物を溶かして食べるが、クマノミだけは食べない。クマノミはイソギンチャクの掃除をするからだ。これを共生関係という。大きな魚の身体についた虫を食べる小魚もいる。生物の間のあらゆる関係が、この瀬にはある。海の中の森は、こうして魚の湧くところとなるのだ。小さいながら、完成された宇宙といつてもよい。百五十キロもある大きな魚が生きていくためには、食物連鎖の輪がどこ欠けることなく完成されていなければならない。大きな魚だから、一日で食べる量も多い。この食欲を満たすために、たいへんな量の小魚やプランクトンが必要なのだ。このクエよりも強いのは人間だけで、その瀬ではクエは食物連鎖の最終段階にいるのだ。人間さえこなければ、クエはこの瀬で穏やかに暮らすことができる。巨大な魚も生きられて、この瀬は完成された森であり、完全にバランスのとれた宇宙なのである。

大きな魚が生きられる生息環境がなければならぬ。百五十キロのクエが生きられてはじめて、海の命は完璧に保たれているということが出来る。「千びきに一ぴき」の漁とは、この生息環境を護るといふことなのだ。つまり、瀬の主であるクエを殺すことは、完全だった調和が崩れることを意味する。

「作者を離れたら、物語はあらかじめそこにあるものとして存在する。」とも立松和平は書いている。確かに「海のいのち」をどう読むかは、作者の意図に関係なく一人ひとりの読み手に委ねられるべきだろう。ただ、自分の読みを明確にするために、作者自身の思いも見ておくことは教材解釈を深める上で有効な手法だと思う。